

医療組織に関する学際的研究

Interdisciplinary research on medical organization

研究代表

黒澤 壮史

KUROSAWA Masashi

所 管：情報科学研究所

研究期間：令和2年度～令和4年度

研究代表者：黒澤 壮史（本学准教授）

研究分担者：高橋 淑郎（本学特任教授）、高橋 意智郎（本学教授）、
金澤 大祐（本学専任講師）

研究の目的・概要

本研究は、昨今世界に深刻な影響を与えている新型コロナウイルス感染症問題を受けて、その社会的重要性をますます高めている医療組織のマネジメントについて学際的な研究を通じて知見を提供することを目的としている。

医療組織は、社会的存在感や特殊性から医療経営など独自の学問領域が成立している一方、経営学領域においても研究対象として扱われることが多い。その一方で、領域ごとに様々な知見が分断されているため、本研究課題では非営利組織研究、経営組織論、経営戦略論、法学、などの多面的な観点から研究を遂行する。本研究が志向しているのは、医療組織に関する研究を専門領域の異なる学際的な研究知見のインタラクションを通じて新たな知見を生み出すことを意図するものである。

本研究課題の分担者である高橋（淑）はこれまで、民間企業が導入を進めているバランストスコアカードの医療組織への応用を論じてきた。その意味で、高橋（淑）は研究対象としての医療組織や非営利組織全般について知見がある。

加えて、本研究課題の代表者である黒澤は、これまで組織変革や戦略形成プロセス、イノベーションといった領域について研究を重ねてきた。とりわけ、組織のミドルや現業メンバーによるボトムアップ型のコミュニケーション戦略（学問的にはissue sellingやupward influence）についての研究を通じて、トップマネジメントだけでなくあらゆる階層のメンバーが主体的に組織のポジティブな変革に参加するような組織のあり方について研究を重ねてきた。医療組織はとりわけ職域によって権力構造が異なる領域である（医師が非常に強い）ため、組織全体の活性化という観点からも、ボトムアップ型のコミュニケーションや現場の主体性といった研究は医療組織にとって意味のある研究になると考えている。

最後に、金澤はこれまで法学・法務的な観点から研究を重ねてきた。医療組織は一般的な民間企業に比べて制度的な制約条件が多く、それらの多くが法制化ないし所轄官庁によ

る明文化された制度や暗黙的な慣習によって規定されることが多い。そのため、法学だけでなく法務的な観点からの研究蓄積がある金澤によるアプローチは学際的研究において非常に重要な役割を占めている。

医療組織は、単なる非営利組織の一形態というだけでなく、人間の死生観や倫理的背景などに密接に関わるうえに、医師の社会的地位や権力性などに鑑みると特殊性の高い組織である。単に社会的に様々な意味付けがされやすい医療組織という対象を学問的にも多様な観点から研究するという本研究の試みには学問的な意義だけでなく、社会的な意義も存在するものと考えられる。社会的な存在感と比較すると学問的な研究の余地を残す領域であることや、本学教員の多様性という強みを活かす研究プロジェクトである、という観点から本研究課題は本学にとっても意義のある研究となると考える。

活動経過報告

活動としては、プロジェクト開始直後から新型コロナウイルス感染症の問題によって、想定していた病院へのヒアリングが行えなくなってしまったため、計画の大きな障害になってきた。インタビュー調査も設定したものの感染症問題が社会的に深刻さを増す中でキャンセルせざるを得なくなるなど、様々な障害が生じており、残りの研究期間を考えて計画を修正しながらプロジェクトを進めている。

研究会を定期的に開く中、現在では想定外に長期化する問題に対して、文献研究と二次データに関する調査研究への切り替えを模索している状況である。文献研究については各自が進めているが、法人区分の議論やTMTの構成、組織レジリエンスなどの視点が持ち込まれている。

二次データについては分析上の理論枠組みの設定と入手可能なデータを整理しながら調査設計を組んでいる段階である。現在、研究会において複数のデータについて利用の検討をしており、実現の目処が立ち次第調査の実行に移行していくこととなる。

リサーチ・サイトとの関係性は維持されているため感染症の問題が調査可能な状況まで収束すれば当初の調査設計を迅速に遂行するということになるが、現状では病院の業務が非常に当初想定していたヒアリングだけでなくアンケートも実施が困難な状況にあるため想定したような形では研究が遂行できていないが、軌道修正をしながら研究成果を見出す努力を続けている。